

書評

野村純一著

『昔話の旅 語りの旅』

佐々木 達司

鼠の浄土

昔話の鬼たち―「鬼むかし」前夜

民話の人物造形―江差の繁次郎ほか

語りの旅

昔話・語り手・ことは

昔話・語り手・言葉

―ここではその「言葉」に向けて

語り手・伝承者―「モノガタリ」に向

けて

著者は二〇〇七年六月に逝去された。本書はその八か月後に出版されたエッセイ集である。

本書の構成

「昔話の旅」と「語りの旅」の二部構成となっている。まず目次から見よう。

昔話の旅

雪国の昔話―夜ばなしの世界

「山姥と桶屋」の素性―山の昔話

魚の背に乗ってきた男―海の昔話

人參と欲張り婆さん―里の昔話

「女房の首」の話―町の昔話

「産神問答」と六部

天女の話―不思議な台所のこと

「鶴女房」疑義

鼠と昔話

「鼠の嫁入り」の旅

敬子夫人は「あとがき」に、出版の話があったころ、著者は療養中であつたが病状は落ち着いていた、できあがつた目次の日を通し満足そうに、協力した教え子の大島廣志に「これでいこう、ありがとう」と言っていた、と記している。

著者は國學院大學文学部を卒業後、一時期高校に勤務したがその後母校の教壇に立ち、一貫して学生の指導に当たつた。全国各地で昔話調査を行い、語り手の話に耳を傾けるかわら資料や古典を読み解き、口承文芸研究に新境地を拓いた。それらの成果はすでに多くの研究書となつて裨益している。

炬辺の韻律―ふるさとの民話

「あど語り」の承譜

「ハァーレヤ」前後―昔話の合の手

昔話のきた道

中国の民間故事家

北インド汽車の旅

インドで会つた男

「世間話」の話

内容は、新聞や雑誌に発表した昔話・伝説・世間話などに関するものである。何げなく読み過ごしてしまふような短編も、一書になると編集の妙か、論旨が鮮やかになってくる。

本書の主題は、

- ①昔話はどのように語られてきたか
- ②これから先、誰がどのようなことばで昔話を語るのか

ということに尽きよう。

紙幅の都合もあり、これらを主に見ていきたい。

雪国の昔話―夜ばなしの世界

一九七五年『別冊週刊読売』に掲載された、四十ページを超える長編である。

「おおよそ今日までに昔話の佳い語り手は他を圧して雪の多い土地に見出されてきた」と述べ、それはなぜかと問いかける。

「一般に人はよく、これを長い冬の生活からくるところの保存といい、併せて、そこに比較的近い時期まで営まれてきた囲炉裏端の生活を指摘する。」が、それは表面的な印象に過ぎない、とし、「その理由は層一層、雪国に営まれる人々の常日頃の生活の中に求められなければならない。逆

に言えば、雪に閉ざされる生活を余儀なくされながらも、そこになお一段とこれを尊重し、かつ、大切に継承・管理してきた必然性ともいったものをことのほか考えて行かなければならないはずである。」と力説する。そして、山形県の戸川安章から聞いた話を紹介している。

昭和十七年の一月十五日、氏は現在の飽海郡遊佐町白井新田に産育の習俗をたずねに行かれた。柳田國男翁から「の要請である。ところがその夜、集まってくれた婆さまたちは、それぞれがぎつしりと馳走を詰めこんだ重箱を持ち寄って、互いにその料理をすすめ合いながら順ぐりに昔話を語った。そして、産育習俗の話を求める戸川氏には『今夜はそうした話をする晩ではない。むかし語りの日だ』として一晩中、語り合いこをして過ごしたそうである。

そして、同じような行事が同じ山形県最上川北部の地一帯では昭和二十二ごろ

まで続いていたこと、真室川町安楽城では小正月の夜に子どもたちが村の古老のもとに集まってむかし語りを聞いたこと、さらに地蔵様の夜、お薬師さんの夜、山の神様や庚申の夜にも、村人が寄って昔話を盛んに語った時代が長くあったことを挙げている。

そして、「その行為自体がおおよそ子供とは無縁のところにあつて、大人たちの間で特別の日の、しかも夜になるのを待つて、実に慎重にこれを語り継いでいたとす姿である。」と、昔話を語ることは、かつては大人の行事であつた、ことを指摘する。

そして、「堅苦しくはなく、さりとして終始雪国の生活といった趣きを失していないもの」を選んで十一話挙げ、最初に川合勇太郎『津軽むがしこ集』から「雪女」の話を紹介している。

子供のいない爺婆が吹雪の晩に赤子の泣く声があるので戸を開けると、雪女が子供を抱いて立っている。「子供を抱いてくれ」と頼まれて預かると、雪女は吹雪に碎

け消えたので爺婆が大切に育てる。子供は色の白いきれいな娘になったが風呂呂が嫌いだ。お湯に入れて磨いたらもつときれいになるに違いないと、嫌がる娘をむりに風呂呂に入れる。しかし、いくら待っても上がってこないで、風呂場を覗いて見ると、娘は溶けてしまい、白い泡になって浮かんでいた、という筋である。

「本来、吹雪の夜にたまたま出会った女から、乞われて赤子を抱き、それによって思わぬ怪異に遭遇したり、はては大力を授けられたりする話は、実は冬の津軽に行われる怪談であり、伝説の一つであった」と、内田邦彦『津軽口碑集』の「雪女」を対比させる。

同書には「雪女は又の名を巳の子といふ。美しい女の貌して幼児を懐いては雪の夜に出で、人を見れば、此児を抱てよと乞ふ。」とあり、子は天にまで達するように大きくなり、預かった者は、宝物や大力を授かった、断わった人は死ぬ、と記されている。

「怪異譚の舞台が夏の夕涼みの話題では

なく、時を選んで厳寒の候の、しかも吹雪の晩の出来事とするところに雪国の話の特長が認められるわけである。」と説く。

昔話だけではなく、その成立に関わる伝承や文献を重ね合わせ、この話は主題からして、古くから伝えられている雪女の怪を骨子にして成立したと見る。

民話の人物造形―江差の繁次郎ほか

「話」には早くから比較的安定した話柄や型、あるいは主題を整えて行われてきたものがあつた。その代表的なものとして、薩摩の侏儒どん、肥後の彦市、豊前の吉五、豊後の吉四六、土佐の泰作、備後の彦八、能登の三右衛門、置賜の伊作、江差の繁次郎など、各地のおどけ者を列挙し、この手の話が西日本に多いことを指摘する。

著者が下北半島の調査で聞いた繁次郎話から、「家の中の魚」(話型 大成 笑話 新二)と、「隣からモチをもらった話」を

挙げ、主人公が「端的に江差を名乗ること

から、そのままに道内の人物と印象されやすい。(中略)一概にそうとは言いい切れず、青森や秋田の海辺に行われる話柄では時期を限って松前の鯨場に雇われるヤン衆という具合に見立てている。実際繁次郎話は、南部の海岸の一部にも伝えられて、彼の出自をそこに主張する場合もある。」と、出自と伝承地との関係に注目する。

繁次郎話については、著者の教え子にあたる花部英雄、新田寿弘の論考がある。それによれば、話は北海道の鯨場に出稼ぎに出かけた秋田・青森の漁民や農民によって運ばれ、それぞれの土地に伝えられた。青森県内でも、南部の話は江差を舞台にした親方、殿様を相手にした話が中心になっているのに対して、津軽の話は、役人、警察、親、隣人などを相手にした村内の話として語られる傾向があり、地元の話が取り込まれた場合もある、と見る。

繁次郎の出自は能登ともいわれ、能登の三右衛門話と共通する話型も認められる。話は日本海を北海道に渡り、さらに内地に逆流したとも考えられる。

語りの旅

「昔話・語り手・ことば」は、語り手を対象とした講演の記録である。

語り手が昔話を語り、体験を語ることに触れ、何を語るかが問題であると指摘する。

松谷みよ子が戦争体験を語っていることを例として、その意義を認めながらも、自分自身は研究者として、体験を語らない、対象とするのは昔話である。人間だけが未経験の未体験の世界を語ることでできるのだ、と言いつ切る。

「誰がどのようにしてどのようなことばで昔話を語るのか、これが問題だろうというふうには私は思っています。今までその種の講演を幾つも頼まれて実際に、文庫や図書館で昔話を語っていらつしやる方々をよく話をし、座談会にも引つ張り出されました。その時なにをどのような言葉で語るかというのが最後に残ってしまう重要な問題です」と、これからの語りについて懸

念している。

菅江真澄「はしわのわかば」の「町さへ往たけとか」と、ホトトギスの鳴きまねを挙げ、「鳥が鳴いている、鳥が飛んでいる状況を話してすぐ子どもたちに語ってやる」といった状況があったことを挙げる。そして、土地によつて聞き方の違いのあることを示す。

「包丁取つてこい」

「ボットさけたか」

「鍛先欠けたか」

「てっぺん欠けたか」

こうした「聴きなし」が重要な意味を持つている。昔話を語る時は、こういうまの言葉で、しかも「属目の事象」にそくして語ってきたからこそ説得力がある、と説く。

また、「日本は識字率百パーセントです。中国は漢字の国だから識字率がわりと高く八十パーセントです。インドの識字率は三十六パーセントで、世界最低です。ということは、言語伝承の国なのです。私が天竺にあこがれるのは、言語伝承の国だから

だと思えます。」と述べている。

先に雪女の例に挙げた『津軽口碑集』の調査で、内田邦彦は語り手が読み書きできるかどうかによつて分けている。これによれば大正九年、津軽の語り手の識字率は男性が七八パーセントに対し、女性は三六パーセントに過ぎない。当時はまだ女性に、言語伝承だけの昔話を語る人たちがいたのである。昨今の調査では、文字による知識を排除することは難しい。

昔話はどうのように語られ、これからのように語っていくのかということに、著者がこだわり続けるのは当然のことであろう。

話の冒頭で、大学から「在外研究」のチャンスを与えられ、中国やインドのフィールド調査に出る。昔話を含めて民間説話、かつての天竺、つまり、インドからわが国にもたらされている。日本人は古くから大きく三つに分類し、天竺（北インド）・震旦（中国）・本朝というように呼んでいる。この分類は、平安朝末期の説話集である『今昔物語』がとっている。日本の

説話はだいた天竺から来たのだろう、さらに震旦を経て来ただろう、それが、わが国の仏典にも定着し、説話集にも定着しただろう、こういう考え方をもっている、と述べている。

そして本書後半の「中国の民間故事家」は、一九九二年、遠野市で開かれた世界民話博に参加した中国の語り手、譚振山のこと、「北インド汽車の旅」と「インドで会った男」は、あこがれの天竺・震旦の旅行記である。

「世間話」の話

終章に、著者が幼いころ父から聞いた「須田町食堂の猫の首」の話を挙げる。安くてうまい評判の店に対するいわれのない中傷や誹謗のたくいであろう。大学生となって聞いたのは渋谷食堂のカレー・ライス、卒業後には上野駅裏の焼きそば屋、そして後年、ニューデリーのネール大学に短期滞在して聞いた留学生会館のそれである。いずれもバケツの蓋から猫の首がはみ

出していたという不気味な話である。

また「味の素は蛇を使っている」という話も猫の首同様お馴染みの話だったとして、「味の素に蛇を買ってもらう」話、味の素が「断じて蛇を原料とせず」と新聞広告した話をもとに、論を展開する。この手の話はいつ、どこでも生まれる可能性がある。

私も経験がある。昭和三十年代に通っていたラーメン屋のダシが、ミミズだったという噂が広がったことがある。店主夫妻は釣り好きで、釣った鮎をダシにしていたのである。餌にするミミズを捕っている姿を見た人が誤解したのである。

戦時中、味の素の工場で働いていた知人から私が聞いたのは、蛇ではなく蚕糸を取ったあとの蛹が原料だったという話である。口止めされていたというから、味の素本舗は風評被害に神経を尖らせていたのだろう。

著者が口承文芸研究に関わった時期は、昔話が家庭で語られなりはじめた昭

和三十年代から伝承的な語り手がいなくなった近年までと重なる。

簡潔な文章に口承文芸のエッセンスが込められた一書である。一般の人々にとつては昔話の入門書であるが、研究者にとつても口承文芸再考の手引きとなるだろう。

(二〇〇八年、本体二六〇〇円、アーツアンドクラフツ)

(文芸春秋・たつじ／青森県民俗の会)